透壁空間体

アキバ的透明性を用いた現代のドゥオモ

指導教員　吉松秀樹教授　　6AEB2219　佐長 秀一

1. 内部が透過する

秋葉原では店舗の中身が視覚的に溢れ出していて、外部にいながら内部にいるように感じることができ、外部での透き通った空間体験に魅力を感じた (fig.1)(fig.2)。

fig.1 表層に溢れ出る様相

fig.2 閉鎖的な内部空間

2. アキバ的透明性

秋葉原で感じられた透明性は看板などによって本来見えていない空間が現れたように感じる知覚的な透明性である。外部にいながら内部を感じられる虚の透明性と似たものである (fig.3)。

fig.3 看板によって表出する内部空間

3. アキバの都市構造

物理的に透明であるガラス張りの建築とは違い、街に対して違和感なく内部を現し、想像させることで隔たりとなる存在が薄くなっている。物理的に不透明であるはずの壁体を透過しているように認識することで、実際の距離とは違う距離感が存在している (fig.4)。

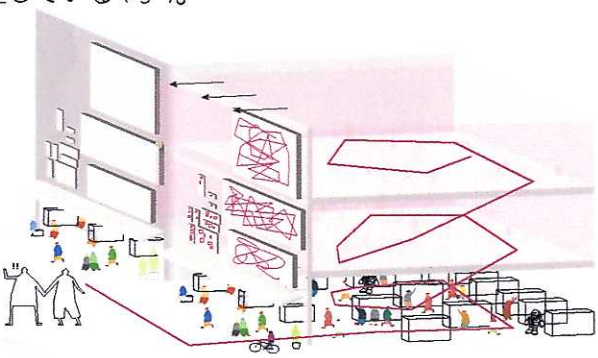

fig.4 認識上の距離と実際の距離にずれがある

4. 距離感のずれ

外部と内部、内部同士とを隔てる壁厚は一様な厚さで存在しているため、その壁厚を不均一に変化させる。同時に知覚させることで認識上の距離とは異なった実際の距離があり、認識上でずらすことによってアキバ的透明性と近似した空間体験が生まれる (fig.5)。

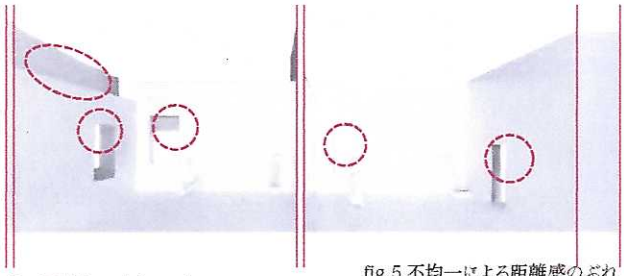

fig.5 不均一による距離感のぶれ

5. 現代のドゥオモ

同じコトやモノに求心性を求め一つの共同体として、また精神的支柱として存在しうる場は本来開きたいが機能上閉じなければならず、そのため心理的に壁のある場となってしまう。そこで不透明である壁体を透明に認識させ、機能を表出させることで価値観の異なる人にも魅力が伝わり、様相を知るきっかけとなり新たな関係性が生まれる。そこは現代においてドゥオモとなる (fig.6)。

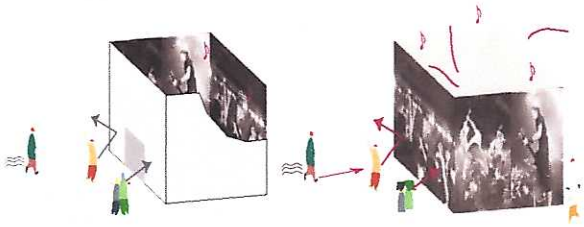

fig.6 生活の中心として交わり、繋がる

6. 透壁空間体

アキバ的透明性をもつ建築では、知覚上透明な空間を連続させていくことで、自己の認識や体感によって領域が一点にとどまることがなく、状況に応じて変化していく。そのため様々な機能同士が浸透し合い、相互の空間の様相が表出し、多様な空間体験をすることが出来る。

7. 敷地の選定・手法の定型化

異文化が重なり合うような場所、都市の境界を繋ぎ合わせることでより交わり、関係が作られて行く場を考えていく。そして分析を深め、手法の定型化することを目指していく。